

純潔と寛容(三)

本多弘之

honda hiroyuki

海

人間の生き方において、「純潔と寛容」は解決できない矛盾となる。この二つの方向を、普通には適度の割合で混ぜ合わせながら、自己確保をしているのがわれわれのありようなのであろう。しかし、その基準がまったく思いもよらない形で揺り動かされるのが、現代社会の深刻な日常的事情である。というのは、地球規模の生活領域の交流が、文明の利器によって有無を言わずにわれわれの身近な日常に侵入してくるからである。

具体的な人と人の交流にも、マスコミによる情報にも、また生活を支えている物品の交流にも、他文化との交互の混ざり合いが必然である。他を認め、他との交流による自己の新しいあり方を、日常的に新しく確保してい

かなければならない。普通の生活圏は、特別に外国の仕事に密着するというわけでもなくとも、生活文化の内面に地球規模の変動情報が、いつの間にか入り込んできていることを言うのである。ここに小生は、大乘仏教が提起した「大悲」の課題からの大切な方向性を、今一度、斬新な感度を持って見直す必要があるのではなからうか、と考えるのである。

大悲とは、憐憫の情について人間の心情の

限界を教えながら、より根本的な「慈悲」という課題を呼びかけているのであると思う。

「慈悲に三縁あり」（『大智度論』『浄土論註』）と言つて、「衆生縁・法縁・無縁」という言葉を出して、如来の慈悲は、無縁の慈悲だから大悲なのだという。人間は他と一緒に命を生き合っているからには、互いに他を許容し、他に対する理解と同情を必要不可欠な心情としている。けれども、人間は自分の生活範囲に関わつて、遠近感と好悪感とを抱くものである。あらゆる他者を平等には感覚できないのである。それを、たとえ「法」（基準や論理や法則など）によつて一応平等に近づけたとしても、許される限界とか例外とかが残るのである。そういう事態を超えて、絶対無条件の慈悲を「如来の大悲」と教えるのである。

これを、今考えている文化の交流状態に関わつて言うとするなら、いかなる歴史や社会の相異をも包んで、一切を許容する方向が「如来の大悲」の教える方向なのではないか、ということであろう。けれども、そのことは逆に言うなら、個々の地域や地方の小文化をそのままで評価し、それぞれの価値観や言語を包容していくということでもある。さらに言うなら、個人個人の違いや特質を全面的に許容しつつ、お互いに自己を保持することが許

されるということである。

これは近現代の合理主義的な人間関心と、必ずしも一致しない。少なくとも人間を能率や効率の間尺で計量し、グローバルな基準と称して、大量生産・大量消費の「文明」を「正義」であるとするような、いわゆる経済合理主義とは方向が異なるとも言えよう。つまり、経済的価値や商業的物量の評価の方向には、個体としての人間存在の絶対的な尊さを見失わせ、平均化された時間空間の中で、たった一度の、今この人生の意味を空白にする方向が付帯するものだからである。

この大悲なる「本願」に出遇つた親鸞が、大悲のイメージを「海」で喩えていることは有名である。海の徳を語るものには、『華嚴經』『涅槃經』等があり、その徳の数えあげかたにも多々あるが、その中で親鸞がとりあげるのは、特に海の「一味」の徳である。一味とは、数多くの河川がそれぞれの色や味を持ち込んで海に流れ入っていくのであるが、どんな大河が流れ込んでも、海の大きさはそれを同じ海水の塩味に変えてしまう。海の味は、厳密にはその場所によつて少しは異なるのだそうであるが、古人の感覚では、同一の塩味だと思われていたのである。

この同一海味の功德を、親鸞は好んで譬喩に使用したのである。われらの命を、「生死海」といい、「煩惱海」といい、「衆生海・

群生海」といい、「無明海」ともいう。そういうわれらの迷妄の現象世界が、大悲のはたらきを受け容れたなら、その現実が転じて願海のはたらく場所となり、「光明海」となり「一如法海」ともなる。河川がその流れてくる流域の岩石や土味や、そこに茂っている樹林などとの関わりによつて、それぞれ異なる河川の色や味を持つ。それが生存を取り巻く時代や歴史や社会や、さらには個人の実存状況に喩えられるなら、大悲は本願として衆生に自覚されるとき、その河川に喩えられるような独自の状況を包んで、その人を支え育み「破闇満願」（闇の生活を転じて、深い生存の願いを満足する）の事実をもたらすのである。その時に、河川の状況の如何を問わず、あらゆる状況を摂取して、転成する。

その転成は、一切を無色無味にするのではなく、「青色青光・赤色赤光」と言われているように、個の独自の意味を確保しつつ、大いなる意味に転ずるというのである。このことが真に他を受け容れて、しかも少しも自己自身を失わないという、「純潔にしてしかも寛容」という、今の時代の重要な課題を方向付けているものではないかと思うのである。

（ほんだ ひろゆき・親鸞仏教センター所長）